

巻 頭 言

告知とセカンド・オピニオン



日本歯科大学学長

中 原 泉

Sen NAKAHARA

私の親しい知人が、肝臓がんになった。

腹痛を訴えて、彼は近所の内科を訪れた。その場で、都内の大病院への紹介状を手渡された。翌日、同病院に即日入院、3日後に手術をうけた。執刀した外科医から、「患部はすべて切除した。取り残しはない」と告げられた。術後、抗がん剤を投与することになった。

このような事例は、医者には日常茶飯事であるが、患者にとっては正に晴天の霹靂!、一夜にして還暦を迎えた人生が激変した。彼は伝手を得て、がん専門病院にセカンド・オピニオンを求めた。がん専門医は、「病巣は取れているので、抗がん剤の必要はない」と告げた。

ここで彼は、ふたたび奈落の底に突き落とされた。第一医と第二医の見解が、右と左に異なるのだ—どうすればよいのか?

素人ながら私は、かなりの進行がんではないかと疑った。それゆえに、両医とも最悪の告知を避け、第一医はとにかく抗がん剤で抑える。第二医は再発すれば再手術する、と考えたのではないかと。常に非情が重なっているから、医者にとって告知は常に難しい。

実は20年ほど前、アメリカへ留学した後輩に深夜、電話で叩き起された。検診をうけた奥さんが、胃がん、余命数ヶ月と告知されたという。パニック状態の彼をなだめながら、私は肉食系のドライな合理主義を憤った。

一方、30年ほど前、私の義父が肺がんの手術をうけたが、私どもは徹底して病名を伏せた。彼は良性と信じて疑わず、再発に恐れおののくこともなく、先月、91歳の天寿を全うした。このように、人生には知らないほうが幸せ、ということが少なくない。

知人は昏迷の末、サード・オピニオンとして医学部の教授に縋った。第三医は、「手術した医者が一番分かっている」とアドバイスした。ところが彼は、すでに第二医に転医してしまっていて、今さら第一医には戻れない。彼は、軽々にセカンド・オピニオンを求めたことを悔やんだ。

折角、最高レベルの病院を巡りながら、対蹠する見解を示されて、彼の心は千々に乱れた。むろん、両医が間違ったことを勧めている訳ではない。しかし、がん細胞は気紛れだから、どちらの選択も治癒するという保証はない。今の彼は、いずれの方法を選ぶべきか、判断できる心理状態にない。

幾つもの病院をさ迷う彼の苦悩は、他人事ではない。

略 歴

中 原 泉（なかはら せん）NAKAHARA, Sen

生年月日 1941年2月12日

学校略歴 1965年 日本歯科大学卒業
1974年 日本歯科大学教授
1979年 日本歯科大学新潟歯学部長
1987年 日本歯科大学新潟短期大学学長
1989年 医の博物館館長（現在に至る）
1991年 日本歯科大学学長
1995年 日本歯科大学新潟歯学部長
2000年 日本歯科大学学長（現在に至る）
2000年 学校法人日本歯科大学理事長（現在に至る）
2006年 財団法人歯科医療研修振興財団理事長（現在に至る）
2006年 社団法人日本私立歯科大学協会会長（現在に至る）

専門分野 歯科人類解剖学

そのほか 1975年 医学博士（日本大学）
1992年 第18回日本歯科医学会総会会頭
1996年 マヒドン大学名誉博士（タイ）
1999年 華西医科大学名誉教授（中国）
2006年 中山医学大学名誉博士（台湾）
2010年 日本歯科医学会会長賞